

---

# Wonder Wander

Wiz Craft

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

Wonder Wander

### 【コード】

N9944C

### 【作者名】

Wiz Craft

### 【あらすじ】

廃墟街で次々と起こる子供を狙った首切り事件。ただ生きるために平和な生活を望んでいた少年達は悲劇にもその真相へと導かれて行く。

第一話 一つまみの善行（前書き）

本作品を御覧下さる前に（2009/1/20）

本作品、旧タイトル『ANTIQUÉ』は2009/1/20を以って大幅な減稿・修正を経てそのタイトルも『Wonder Wander』へと変更させて頂きました。

旧作を御覧頂いた皆様には大変御迷惑をお掛けして申し訳ありません。

本作は現在の形を以って、完結作とさせて頂きます。また落ち着き機会がありましたら、続編を執筆しようかとも思っていますが、以前とは大分描写に対する考え方も変わり、「死」というものに対する捉え方も、今この作品を眺めると自分の中での変化に驚いています。

そんな過去の自分の在り方を反映するためにも、過去の描写はなるべくそのまま残しています。

本作には物語では行っていないと言われている禁忌に触れている描写もありますので、残酷な描写が苦手な方は御覧になる事をお控え下さい。

以上の事を踏まえた上で、拙作ではありますが本作品を宜しくお願致します。

## 第一話 一つまみの善行

頬を撫でる微かな風。少年が目を覚ますとそこは粗末な寝台の上だった。

部屋に差し込む和らかな陽光。昨日から降り続いていた雨はいつの間にか上がっていた。

身体を起こして洗面所で顔を洗う。鏡の前に映った栗色の髪の毛の少年。青い瞳が見つめるその先には冴えない表情が映し出されていた。少年の名はマウス。ここ廃墟街の一室に住み込む俗に言うスラム街の孤児である。彼は数年前からこの街で同居人と共にここに住み込み始めた。

ここに来たその経緯を話す事は少年にとって苦痛以外の何モノでも無い。少年にとって過去など生きるためには何の意味も持ち合わせていない。

蛇口から僅かに零れる水をすくい顔を洗っていたその時だった。

「よう起きたか、死人面しにめん」

そんな掛け声と共に、マウスの背中が勢い良く叩かれる。

「痛いな、朝から何すんだよフェザ……おはよう」

肩まで伸びた灰色の髪を手櫛で梳かしながらマウスの肩越しに鏡を覗くその少年。

彼の名はフェザリオ。先程のマウスの同居人というのが彼であった。

「寝起きは？」

「最悪」

そう言ってフェザリオはシャワールームへと消えていった。

「何だよ、お湯出ねえじゃんかよ。またかよ、ふざけんなっつうの！」

シャワールームからそんな呟きが聞こえてきた。ボイラーが故障するのは日常茶飯事の事だ。今更驚く事でも無い。

「ちゃんと確認してから入りなよ、このバーカ」

「お前ベランダの外までふつとばすぞ」

そんな何気ないやりとりがここでの朝の風景だ。

通称「はいきよがい廃虚街」。名前が示す通りこの生活は生きる者にとって厳しい。法の存在しないこの世界では、道を歩いてて、たとえ、いきなり殺されたって文句は言えない。自分の身は自分で守る。それがここでの唯一のルールだった。

「なあ、そこ石鹼ある？」

「あるよ」

洗面所においてあっただいぶ小さくなった白い石鹼を手渡すと、「サンキュ」といってフェザリオの手は引っ込んだ。

この石鹼一つ手に入れるのだって僕らにとっては一苦勞なのに。

「今日どうする？」

「まずは朝飯。後の事はそれから考えようぜ」

予定の無い一日の始まり。

彼らに予定など無意味。その時その時を瞬間的に生きる。それだ

けさ。

空は青く澄んでいた。マウス達の部屋から地上へ降りるにはこの錆びた鉄骨の階段を使う。毎度のことだけど、この踏みしめる度に崩れそうな音を立てるのはなんとかならないものか。そんな事を考えながらマウスが錆びた鉄骨の階段を降りていると、いつもの腐臭が漂ってきた。原因は分かっている。この階段の脇にあるでかい鉄桶。全長三メートルはあるだろうか。この廃墟に住んでる住人の公共のゴミ捨て場になっているのだ。何でもかんでも捨てるから、既にもう生ゴミが鉄桶から溢れて山のようになっていた。フェザリオは無言で鉄桶に蹴りを入れると、大通りに向かって路地を歩き出す。

「朝ご飯どうしようか？ 昨日報酬出てないからお金ほとんどないよ」とマウス。

「こつう時は使える奴を使うんだよ」

フェザリオの心当たりはマウスもよく知っていた。

「ドナテロさんとこ？」

フェザリオは煙草を一本口に加えると無言で頷いた。

一週間に一度は必ずと言っていいほど二人は世話になっている人物。だが、他に方法も無い。

「悪い、火ある？」

「あるけど、あんま吸いすぎると早死にするよ」

ポケットから錆びたジッポを取り出したマウスはフェザリオに手渡す。

「死期が早まるうが遅まるうが関係ねえよ。誰だって死ぬときゃ死ぬさ」

死ぬときゃ、死ぬか。まあ、そうかもね

大通りに出ると、今まで建物に遮られていた眩しい陽光が視界を包んだ。

同時に、走る衝撃。見ると、一人の幼い男の子が目の前で転んでマウスを見上げていた。

「ごめん、大丈夫だった？」

五才前後だろうか、その子は手の中に持っていたものをすつと見せてきた。

「ネジあつめてたの」

ネジあつめか。昔僕もやったな。どんなにたくさん集めてもわずかなお金にしかならない。とても割のいい仕事とは言えなかった。でも、それしか仕事は無かった。

マウスは昔を思い出しながらその小さな男の子を見つめていた。男の子は落としたネジを懸命に拾い集めていた。マウスも一緒になつて拾って上げると、男の子はたどたどしい声で「ありがとう」と言った。フェザリオは黙ってその様子を見つめていた。

「あ、そうだ。お詫びにこれあげるよ」

そう言ってポケットの中にしのばせていた飴玉を少年の手に握らせるマウス。

少年は手の中の飴玉とマウスの顔を交互に見つめながら何か言い

たそうだった。

「いいんだ、遠慮しなくて。ただ一個しかないけど。さ、持っていない」

その小さな男の子はコクリと頷くと、その場から去っていった。

「ただの自己満足だぜ」とフェザリオ。  
「いいんだ」

ただの自己満足かもしれないけど、少なくとも後悔はしていない。  
だからそれで良かった。

## 第二話 ピエロショー

大通りから歩く事十数分。マウス達は噴水広場へとやってきていた。

ここまで来れば目的地までは目と鼻の先だ。

広場の中央にある噴水には女神の銅像がある。緑青ニッケルに塗れながら肩に携えた水瓶から水を流すその姿はお世辞にも綺麗とは言えないが、どこか心を落ち着かせるような、そんな雰囲気を持っていた。

普段は静かなこの広場だが、この日は少し様子が変だった。

「なんだあの人ばかり」

フェザリオの視線は噴水前の人ばかりに向けられていた。

「すごい人だね」

「見てみようぜ」

人ごみを押し分けて進むフェザリオの後ろにマウスはついて行くと、人ごみの中心にいるその正体が明らかに二人の前に明らかとなった。だぶだぶの衣装を纏い、顔を真っ白に塗り、鼻を赤く染め、両眼を十字に黒で縁取ったその姿。

なんだピエロか

ここ下層じゃそう珍しいものじゃない。自らの芸で金を集めようとする大道芸人はここじゃ少なくない。でも、それならば何故こんなに人が集まっているのか。

片手に細身の剣を持ち、頭上に翳して見せるピエロ。頭上に翳されていた剣がピエロの首元に当てられる。

何する気だ？

次の瞬間、鮮烈な光景が目飛び込んできた。  
巻き起こる悲鳴と、同時に飛び散った鮮血が噴水の水を紅く染める。

「首を……斬り落とした!？」

無造作に投げ出されたピエロの首。腕はだらりと下がり、ぶらぶらと揺れている。

何かのトリックなのか。でもそれならばこの血の臭いは。

誰もが言葉を失っていたその時、残された肢体がゆっくりと動き始めた。再び観客から上がる悲鳴。肢体はゆっくりと自分の生首を掴み上げると、それを観客に向けるように突き出して見せた。黒い縁取りの中に白目を剥き出した生首。生々しい死人の顔。口からはまだ鮮血が垂れていた。

本当に死んでるのか。そんなわけはない

なら実際に見ているこの光景はなんだ。

暫くするとピエロは持っていた首を元の位置へと当てがった。すると、まるで何事もなかったかのように、ピエロは目を開きお辞儀して見せた。

湧き起こる拍手の中、ピエロはお辞儀をしたまま、そのまま動かなくなった。シヨアの幕切れを悟った観客達は再び街の雑踏へと消えていく。

不意に肩を叩かれてマウスが振り向くと、そこにはフェザリオが立っていた。

「オレ達も行くこうぜ」  
「ああ、うん」

静止したピエロに送り出されて、再び二人は歩き始めた。

噴水広場から下る道を進んだ先の二岐地点に赤い屋根の建物がある。それがドナテロの店だ。

正面玄関に差し掛かると、真っ白な看板が立掛けられているのが二人の視界に映った。

酒場営業時間 PM 6:00 ~ AM 3:00

正面玄関は今日も閉まっていた。入る時は大体いつも裏口から入る。僕らは静かに建物の裏手へと回った。

「失礼しまーす」

裏口から中へ入ると、中は静まり返っていた。

綺麗に片付けられた店内。店内の木椅子は皆机の上に逆さまに上げられていた。

「寝てるな多分。食糧庫あさりに行こうぜ」  
「また無断で？」

まあ、今日に始まったわけじゃないけど

黙って食糧庫へ向かおうとしたその時、裏口の扉が開いた。

扉から茶髪が覗き、茶色の瞳が二人の姿を捉える。手には大きな袋が握られていた。

「何やってんだお前等」

「いや、あの」

苦笑いしてその場を誤魔化す二人。

ドナテロだ

ドナテロは彼らの姿を見ると何も聞かず、調理場へ向かい、酒場のカウンターに温かい豆のスープと乾いたパンを数切れ出した。

「朝から窃盗とはお前等も忙しいな。請負業はどうなってるんだ？」

「いやさ、急にドナテロの顔が見たくなって」

いい加減なセリフを吐くフェザリオ。

「それより、ドナテロさん珍しいね。こんな朝からどこか出掛けてたの？」

ドナテロは、カウンターの向こうで、食器の整理を始めていた。いつもながら几帳面だ。

「街に買い物行ってたんだ。食糧の買い置きが切れてな」

そんな他愛もない会話をドナテロと交わしていると、今朝二人が見たあの話が飛び出した。

「そういや今朝、すごいモノ見ちゃってさ。噴水広場で」

そうフェザリオが切り出した。二人は見たままあのピエロショーの話をもドナテロにした。それも実はドナテロはこの職業につく前は

大道芸をしていたのだった。ドナテロなら今朝のトリックが分かるかもしれない。二人はそう思ったのだった。

「あれは本当に死んでたぜ。なあマウス」

「うん、だって血の臭いしたし」

二人の話聞いて、ドナテロは笑い声を堪えきれない様子で漏らした。

「お前達ほど単純だと騙す側も気分いいだろうな」

「なんだよそれ！」

ドナテロはさんざん笑った後、二人に語り始める。

「そいつは『首落とし』っていうれっきとした大道芸さ。今じゃやる奴はほとんどいないけどな」

「あれが芸？ やっぱトリックあるの？」

でも、一体どんなトリックなんだ？

「お前等が見た頭は偽物さ。本物そっくりに精巧に作られたな。実際はその下に本物の頭がある。ぶかぶかの服を着てたのはそのためさ」

「え、でもちゃんと血が吹き出ってたよ」

そつだ、あの血はどう説明するんだ。

「そこがこの芸のえぐいとこだな。なるべく本物に見せかけるよう、この芸じゃ動物の血を使うんだ。お前達が見たのはきつと犬か猫の血だろ」

あれが動物の血？  
でも確かに、それなら納得が行くような。

ドナテロの種明かしにマウスは少し落胆を隠せなかった。

「まあ、そうがっかりするなよ。もしかしたら本物の悪魔だったのかもしれないぜ」

そう言って再び「くっくっ」と嘲笑を漏らすドナテロ。

「馬鹿にしてんのか」とフェザリオが立ち上がった。

悪魔か、そんなものこの世に居る訳が無い。

あのピエロを悪魔だどこか信じていた自分がマウスは急に馬鹿らしくなってきた。

「飯食ったらちゃんと稼ぎに行けよ。食わせるのだってタダじゃないんだぜ」  
「わかってるよ」

そうして、二人はドナテロの店を後にした。

なんだか今日はしっくりこない朝だ

### 第三話 二つの影

ドナテロの店を出た二人は噴水広場へと戻って来ていた。広場に面した三階建ての古びた木造の建物、そこに二人は用があった。

お金を持たない彼らにとっては、日払いの仕事でもやらない限り生きていけない。

毎日ドナテロさんにお世話になるわけにもいかないしね

両開きの木扉から請負所の中へ入ると、湿っぽくて独特の木の匂いが漂ってきた。中へ入るとまず見えるのが仕事の受発注カウンター。両脇には細い枝葉の伸びた観葉植物が置かれ、カウンターの中では二人のギルド職員が忙しなく動いていた。ここで仕事を引き受けたり、依頼したりする事が出来る。

「結構込んでるな。奥行こうぜ」

「うん」

奥へ向かって見えてくるのがロビー。中央にはガラス張りの大きなテーブルとその周りにはくすんだ葡萄色のソファ。ソファでは数人が寛いでいた。それからロビーには掲示板がある。掲示板には様々な依頼情報が貼られていて、請負人スイパーはこの中から仕事を選んで受注する。そうやって二人はいつもここで仕事を選んでいくのだ。基本的には内容よりも報酬で仕事は選ぶが、あまり羽振りが良すぎる内容は警戒の必要がある。報酬が高いという事はそれだけそのリスクが高いという事に繋がる。何と言っても報酬よりも命が大事だ。好奇心もほどほどにしないと、ろくな結果にならない。

「とりあえず今日の飯代くらい稼がないとな」

「そうだね、そうになると派遣デパッチかな」

派遣という言葉にフェザリオはうんざりした表情を見せた。

「また派遣デパッチか」

『派遣デパッチ』というのは、店の皿洗いとか掃除とか、荷物の運搬とか一時的に人手が必要な場所へ出向いて仕事する。派遣の場合ほとんどが日払いだから、すぐにお金が欲しい時とかに請け負うのだ。

「何にするか。荷物の配達とかしんどいよな」

「だねえ」

掲示板の依頼に目を通していたその時、フェザリオが口を開いた。

「なんだ、先週やけに死亡件数多いな」

「ほんとだ」

掲示板には毎週、街の死亡・負傷者の数が張り出される。ここを出されてるのはここ周辺だけの人数だ。この街では到る所で人が死ぬからギルドもきつと正確な情報は出せてないだろうけど。ある程度の目安にはなる。

いつもは十数人くらいなのに、先週はその倍だった。

「二十三人目の変死遺体」

フェザリオはその隣の張り出し記事を読んでいた。

二十三人目の変死遺体

先月から相次いで発見されている変死遺体だが、今月に入り二十三人目の遺体が発見された。場所は一番街、噴水広場。被害者はこれまで報告されてきた遺体と同様に、首を斬られ死亡。遺体は噴水内に浮かんでいたところを通行人によって発見された。この一連の事件による犯人を決定づける手掛かりは今だ見つかっておらず、被害者の唯一の共通点としては『子供』である事が挙げられる。現在、ギルドの捜査は難航しており、犯行情報を集めている

「一番街、噴水広場ってすぐここじゃないか」

「今月に入りって随分アウトだな、いつだよ。それによっちゃ危なくて歩けないだろ」とフェザリオ。

この連続変死事件については知っていた。でも、まさかこんな近くで起きるなんて。

「それで、あの首斬りパフォーマンスか。どこのどいつだか知らねえけど趣味悪すぎだ」

そうか、そういう事か。あのパフォーマンスはこの首斬り事件を皮肉っていたのか。

確かに、フェザリオの言うとおり趣味が悪過ぎる。拍手していた観客も気が知れない。

「全く狂ってるな。結局、やる事も配達しかねえし」

フェザリオの言葉に、急に現実に戻される。

「やろうよ配達」

たとえ危険だろうが何だろうが、稼がない事には始まらない。

結局マウス達は二人で話し合い、配達の任務を請け負う事にした。

配達の仕事を終えると、辺りはすっかり暗くなっていた。

仕事は低賃金の割りに重労働だった。おまけに依頼人の高慢さといったらこの上なかった。

「あの、豚野郎。派遣だと思って鼻であしらいやがって」

「しょうがないよ」

しょうがない、か。口ではそう言ったものの正直納得はいかなかった。

でも、後悔したってしょうがない。この仕事を選んだのは自分達なんだし、大体納得の行く仕事に出会う事の方が少ない。

暗闇の中、建ち並ぶ廃墟を横目に、マウスとフェザリオは疲労した身体をひきずって帰路を歩いていた。

その時だった。

大通りの遠くで何か小さな影が道を横切った。シルエットからして『子供』だろうか。続いてそれを追いかけるように、もう一つの影。

「何だ今の」



そう語り掛けた時には彼はマウスに背中を向け静かに走り出していた。

待つて

呼びかけに彼は答えない。

マウスは必死にその後ろ姿を追いかけていた。

待つて 待つてよ

けれども声は届かない。いつの間にか彼との距離は大分離れていった。

走っても走ってもその少年は遠ざかるばかり。

いつしかその姿は点になった。

そして夢は途切れた

目を覚ました僕を迎え入れたのはいつもと変わらぬ朝だった。

夢の事は、目覚めてから次第に虚ろになっていった。

変わらない、日常。そして、数日が過ぎた。

## 第四話 悲報

今朝はいつもと変わらない朝だった。何も変わらないと、そう思っていた。

ギルドに張り出された一枚の張り紙を見るまでは。

掲示板に張り出された一枚の張り紙。それを見た時、マウスの中で何かが砕けた。

### 二十四人目の被害者

『連続首斬り殺人事件について二十四人目の被害者が出た。一番街A-25区画、大通りから路地に入るゴミ捨て場で被害者は発見された。被害者の少年は』

文字はあまり目に入らなかった。

マウスの目は紙面に載せられている、その白黒の写真しか見つめていなかった。

被害者の少年、それは紛れも無くあのネジを集めていた少年だった。

それから、どれだけの時間が過ぎたのか。

暫く一人にして欲しいんだ

フェザリオにはそう言った。

どうして、あの子が死ななければならなかったのか。  
あんな幼い罪も無い子がどうして。

生まれてきた事が罪だとしても言うのか。  
彼は死ぬために生きてたとしても言うのか。

彼は……彼は必死に生きてたじゃないか。  
あんな擦り傷だらけの手一杯にネジを溜めて。

彼は死ぬために生きてきたんじゃない。

少なくとも、彼は。

ただ生きようと精一杯だったんだ。

「もういいのか？」

ギルドのロビーのソファーに腰掛けていたフェザリオはそうマウスに語り掛けた。

マウスは無言で、フェザリオの向かいに腰掛けた。

この街では、日常的に死が付き纏う。いちいち気にしてたらそれこそ身が持たない。

ましてや、名前も知らない、ただ一度触れ合った事のある少年に涙を流すなんて。

フェザリオが冷たいわけじゃない。何も言わないのが、彼なりの気遣いなんだ。

「あの時の影……覚えてるか」

フェザは唐突に切り出した。

影か。勿論覚えてる。三日前の夜に見たあの二つの影。一つは子供の影。もう一つは……

「事件が起きたのと丁度同じ区画だよな」

フェザリオの言いたい事は分かっていた。あの日見たあの影。

あれが、もしあの子だったなら。

「通報しよう。あいつが殺した犯人なら、重要な手掛かりになる」

マウスの言葉にフェザリオは頷いた。

犯人探しなんてそんな大それた事をするつもりは無い。

ただ自分達が見た事を伝える事で少しでもあの子の死が報われればと、そんな気持ちだった。

二人はあの日見た全てをギルドに話した。ギルドは有力な目撃情報として、二人の話の聞き入れてくれた。

連続首斬り魔の正体は『道化師』との目撃情報有り

そうギルドに張り紙が出されたのは日が沈んだ頃だった。

夕闇が空を染め上げた頃、二人はドナテロの店を訪れていた。表扉から入るとカランコロンと乾いた木の音が響いた。店の中に居る客は僅か。営業時間だというのに、お世辞にも繁盛しているとは言えない。

「こんな時間に来るなんて珍しいな」

カウンターでグラスを拭いていたドナテロは二人にそう声を掛けしてきた。

「……まあね」

カウンターに座った二人にドナテロはすつと透き通った青のグラスを差し出す。礼も言わずにグラスを手に取り口に含むと、口の中に甘い果物の香りと一緒にアルコールの匂いの匂いが広がった。予想していなかったアルコールの匂いに思わずドナテロを見つめる。

「たまにはいいだろ。子供だって酔いたい時はあるさ」

ドナテロの気配りは素直に嬉しかった。

マウスは客のいないカウンターで今抱えてる気持ちの全てを吐き出した。

ネジを拾っていた少年の事、あの日見た影の事、そしてあの子が殺された事。

「そうか……その子は亡くなったのか」

「僕は何も出来なかった」

そう、何も出来なかった。

「人間は残酷だな」

ドナテロはグラスを拭きながらそう呟いた。

その言葉はマウスの心を刺すようだった。

人は残酷。あの影がもしあの少年だったならば。

僕は彼を見殺しにした

「でも、マウス。お前は誇っていい」

え？

「お前は光になれる」

光？

「お前のその優しさが人を救うんだ」

ドナテロの言葉は何故かマウスの心に強く響いた。

「だから、そう自分を責めるのはよせ」

マウスは心の中で、何度もその言葉を繰り返していた。

自然と瞼が熱くなる。マウスは込み上げてくる感情を必死に堪えていた。

「ありがとう、ドナテロさん」

マウスの言葉にドナテロはふっと微笑んだ。

温かい微笑み、優しい笑みだった。

その笑みに抑えていた感情が思わず零れ出した。頬を伝う涙。

二人に見守られる中、マウスはただただ涙を流した。

いつの間にか店の客は僕達を残して誰も居なくなっていた。

帰り際、ドナテロは二人を呼び止めて言った。

「手ぶらで帰すのもなんだからプレゼントでもやるか」

「マジで。ならオレ金がいい」

そう言ったフェザリオの頭をドナテロは軽く小突いた。

「金が欲しいなら皿でも洗え。代わりに食い物やるから。乾パンでも果物でも好きなだけ持つてけよ」

「そんなこと言っていいの？全部持つてくよ」

マウスの言葉にドナテロはふつと笑って「好きにしろ」とそう言った。

ドナテロとはまだ知り合って一年も経っていないが、二人は心から彼に感謝していた。

辛い時はこうして助けてくれて。口には恥ずかしくて出せないが、いつもマウスは思っていた。

兄さんが居たらきつとこんな感じだろう、って。

微かな幸せを感じていたマウスはこの時完全に忘れていた。

悲劇は突然やってくる

その事を……。

## 第五話 眞実は時に悪夢よりも残酷に

ドナテロの厚意に甘えて二人は食糧庫をあさっていた。食糧庫はキッチンから下った先の地下室にある。薄暗い空間に灯るランプの淡い光。食糧庫にはドナテロの言った通り、大量の乾パンや野菜、そして果物が置いてあった。

「お前泣くなよな、いい年こいて」

果物を服の裾に取り込みながら、茶化すようにフェザリオは言った。

「あんまり言わないでよ。それよりそれ取り過ぎじゃない？いくら持っていつていいって言ったからってそれは……」

「いいんだよ。好きなだけ持って行って言ったんだから」

服一杯に溜め込んだ果物を抱えてフェザリオは言った。

「僕はこのくらいでいいや。乾パンこれだけあれば一週間は持つよね」

「それじゃ足りねえよ。もっと取っとけて」

そんな会話をしていたその時、上から降りてくる足音が聞こえてきた。

「ほらドナテロさん降りてくる前に少しそれ置きなよ。さすがに怒られるよ」

「嫌だね、オレ一度貰ったもんは返さない主義なんだ」

我儘をいうフェザリオを諷めていたその時、足音の主は現れた。

「ドナテロさんごめん、こんなにとっちゃ……」

言葉が途中で詰まる。

目の前に突然現れたソレにマウスは思わず言葉を失った。

「何やってるの……?」

ソレは何も言わずに二人に微笑みかけていた。  
隣でフェザリオが果物を落とすのが見えた。

「どうして……? なんで……?」

目の前で微笑みかけるモノ。

それは。

「ドナテロさん……」

あの時見た『ピエロ』だった。

ドナテロさんがどうして?

あの首斬りパフォーマンスをしたピエロはドナテロだった?

何のために?

溢れ出る疑問。

胸が締め付けられるように苦しくなった。

「最悪だ」

フェザリオの顔は真っ青だった。

最悪？ 何が？

何か悪い夢を見ているようだった。

その結論からただ逃げたくて必死に自分に問いかけ続けていた。  
夢を見てるんだ。きっと。

「はは、嘘だ」

「マウス、目を背けるな」

フェザリオの声。

「嫌だ。信じない」

こんな現実信じるもんか。

「死にたいのかマウス！」

フェザリオの怒声が響いた。同時に引っ張られる身体。

「くそ！ くそ！」

フェザリオは必死にマウスの手を引いていた。

外へ出る唯一の出口はアイツが塞いでいる。逃げる場所は一つしかなかった。

食糧庫の奥の鉄の扉。冷凍庫。  
後ろも振り返らずに冷凍庫の扉を開くと、冷たい空気が身体を包み込んだ。

「嫌だ、もう嫌だ」

「諦めるな。ここで諦めたら全てが終わるんだぞ」

ふと辺りを見渡す。そこは積み重ねられた氷の世界だった。

壁際に詰められた木棚。そこには調理用の肉が並べられていた。

そして奥の棚に目をやった時、二人のその思考は完全に停止した。

それは陳列された肉と同じように棚へ並べられていた。

「……嘘だ」

それは

殺された二十四人の被害者達の首。

「……信じない」

そして、並べられた最後の首には

あの子の顔があつた。

「うあああああ！！！！」

「マウス！ 落ち着け！」

気が狂う寸前だった。いや狂ったのかもしれない。

「信頼してたのに！ 兄さんのように思ってたのに！」

「マウス！ 落ち着けって！！！」

その時、冷凍庫の扉が開く音が聞こえた。  
アイツはゆっくりと中へ入ってきた。

不気味な笑みを浮かべたまま。手には鈍い光沢を放つ包丁。

「口封じのためにオレらを殺す気か……？」

そう問い掛けるフェザリオの声は震えていた。

問い掛けに答える声は無い。代わりに僕らとの距離を縮める足音。

「お前は人間じゃない」

そう責めるフェザリオの声は悲しさに溢れていた。

フェザリオはすつと屈むと、その場に崩れ落ちていたマウスにそつと耳打ちをする。

オレがあいつの注意を引く……その間に逃げろ

震えた声。

それはフェザリオの覚悟の言葉だった。

全てがスローモーションのように

そしてフェザの身体が動いた。

がむしゃらに飛び掛っていくフェザの後ろ姿。

ピエロとフェザリオの身体が交錯する。

待っている現実

Wonder Wander

眞実は時に悪夢よりも残酷に。  
首を吊り上げられたフェザリオに翳される凶刃。

「うあああああああ!!!!」

その時、世界が瞬いた

## 最終話 血の粛清

世界が瞬またたいたその瞬間。

たった一度の瞬またたきの間に咄嗟にマウスはポケットにしよばせていたジツポ用の油瓶を。ピエロ目掛けて投げつけた。

「フェザ、離れろ」

その一瞬の隙に、手から解放されたフェザリオがドナテロから離れたのを確認すると、マウスは火を灯したジツポをその手から離す。小さな光が薄暗い冷凍室で放物線を描いた次の瞬間、溢れ出す光。薄暗い閉ざされた空間を照らし上げる程の強い輝き。

「ぐつあああ！」

視界の中で、悲鳴を上げながら炎上するピエロ。

冷たい空気の中で真っ白な蒸気を上げながら、そいつは転げ回っていた。

「マウス、お前……」

ピエロの手から解放されたフェザリオは驚きを隠せない様子だった。

「もう……誰も殺させない」

真白な蒸気を撒き散らしながら、炎は静かに収縮し、そして消えていく。

二人は地面に這はい蹲すくまっているドナテロににじり寄る。

身に付けていた衣装は灰色に焦げ、その身体はまだ僅かに蒸気を発しながら微動だにしなくなっていた。

「……潮時か」

地に伏せていたドナテロが呟いた。

身体を包んでいた火は消えていたが、その全身には酷い火傷を負っているようだった。

「まだ生きてたのか」

そう言葉を吐き掛けるフェザリオ。

ゆらりと立ち上がるドナテロ。けれどもはやその身体では何も出れないように見えた。

「お前達はやはり光だ」

そのドナテロの言葉にマウスは思わず叫んだ。

「ふざけるな！」

僕が光だって！ あの言葉がどんなに嬉しかったか！

あの言葉にどれだけ救われたか

僕にとってあの言葉こそ……光だった。

「気づいていたさ。自分の狂気にはな」

ドナテロは静かに語り始めた。

「だが、止められなかった」

そう語るドナテロの表情はさっきまでの殺人鬼の顔とは違って変わっていた。

「僕達をずっと騙してたのか」

マウスの言葉にドナテロは動揺一つ見せず言った。

「人間には表と裏がある。お前達が見ていた俺もまた真実さ」

表と裏だつて。いつだつて真実は一つしかない。

あるのは残酷な真実だけじゃないか！

「言い逃れようつてのか」

フェザリオの言葉にドナテロはふつと微笑した。

「言い逃れる気はない。ただ最後にお前達に一つだけ伝えておきたくてな」

「最後に？」

ドナテロは微笑を崩さぬまま続けた。

「目に見えるものだけが真実とは限らない」

「この場に来て何言ってるんだ」

フェザリオが詰め寄ろうとしたその時、ドナテロは落ちていた鉈包丁を拾い翳した。

「お前！」

ドナテロは逃げる素振りを見せなかった。

「悪魔はな、すぐ傍に居るんだ」

「だから、何言ってるんだお前！」

フェザリオの問いかけにドナテロは答えなかった。

「お前達もこの世界に存在する限りいずれ気づくさ。最後にもう一度言おう」

そう言ってドナテロは刃を首元にあてた。

「お前達は光だ」

それがドナテロの最後の言葉になった。  
紅い血飛沫が上がる。

二人の目に映った最後のあの表情。

あの優しい表情は間違いなく、彼らが知るドナテロそのものだった。

深夜、ギルドから派遣された調査団がドナテロの酒場の調査を始めた。

二人は重要証人として、明け方までギルドで拘束される事になった。

何を聞かれたのかは覚えていない。  
全ては夢現。<sup>ゆめうつ</sup>

二人は自分自身をこの世界に保つ事だけで精一杯だった。  
明け方、質問という名の尋問から釈放された時、二人はこの事件  
解決の褒賞金として百ペイン硬貨が百枚入った小さなガラスケース  
を持たされた。

これだけあれば数ヶ月は暮らせる大金だった。

だが二人にとって、その代償はあまりにも大き過ぎて。

お前達は光だ

ドナテロが残したあの優しい笑みをいつまでも思い返していた。

## ✂ 最終話 血の肅清（後書き）

あとがき（2009/1/20）

本作品をご覧頂きありがとうございます。

この作品を手掛けたのは今から一年と少し遡ります。

その時はダークファンタジーという名目で、長編連載作品として公開させて頂いていました。この頃の私は、ホラー映画やスプラッター映画をよく好んで、自然描く内容も陰鬱で暗い色調の話が多い時期でした。

ですが、ある時期を境に急に本作のシナリオが自分の中で書けなくなりました。

プロットも適当に行き当たりばったりに描いていたのも勿論理由の一つですが、それ以前にこうした色調に対して、酷い嫌悪感を覚えるようになったんです。

ホラー映画やスプラッター映画を全く見れなくなったのもその頃からです。

つい先日まで、自分が描いたANTIQUE（旧タイトル）も全く振り返る事が出来なかったのですが、本当にここ最近になって自分の作品として受け入れられるようになりました。それが今回改稿に到った経緯です。

非常に勝手ではありませんが今回の改稿・修正をもちまして本作品はここで完結とさせて頂きます。

以前ANTIQUEをご覧頂いていた読者の皆様、本当にありがとうございました。以前執筆分の内容についてもまたいつかシナリオとしてまとめて公開できたらと思っております。

また、改稿後の本作品をご覧頂いた読者の皆様、本当にありがと

Wonder Wander

うございました。

宜しければまた他の作品でお会い出来れば大変嬉しく思います。  
それではまた々

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9944c/>

---

Wonder Wander

2009年4月22日16時19分発行